

# 寶鬘譬喻經に於ける大乘思想

高 島 寛 我

譬喻鬘經の類を調べて見ようと思ひ立つたのは、今から三十有餘年前、レオン・フェアアの梵本百緣經の佛譯と、ゼー・エス・スパイエル<sup>(1)</sup>の刊本梵文百緣經を見たときが始めであつた、フェアア氏は、佛譯百緣經の序文で、「如意樹譬喻鬘 (Kalpadrumāvadānamāla) や、寶譬喻鬘 (ratnāvadānamāla) のやうな韻文化された説話 (梵文百緣經の散文なるに對して) は、百緣經よりも新しい作品である痕跡——ヴィシユム (Viṣṇu) や、無量光者 (Amitābha) の住所である極樂 (sukhavatī) の名——を有つて居る、しかし、それらをやたらに引用して居るのではないが、百緣經の方は、これらの言葉を全く知らないやうに見ゆる」

寶鬘譬喻經に於ける大乘思想

と述べて居る、しかし、氏は、それ以上に、大乘だとか、大乘とかについては、そこでは、何等言ふては居ない。次にスパイエル氏が梵文百緣經を刊行したその序文の中に、大体次の如く述べて居る、

「一の重要な點が、フェアア氏に依て觸れられなかつた、少くとも明確な言葉で觸くられなかつたのである、百緣經は梵文小乘經典であり、支那佛教は小乘として之を知つて居る、(南條目錄、第一三二四號參照) たとひ、それが、そうでないとしても、小乘なる型<sup>タイプ</sup>が、次の點に依つて現はされて居る、即ち、大乘の概念の全く缺如せること、教主の聽衆と隨從との數と各目とが比較的簡單

なること、及び、經に行き亙る精神が、所謂南方佛教徒の聖典と一致することである。更に、外部的特徴に依りて區別されたグループのある數に物語を整理する方法と、全く同じ定型の文句の多數の繰り返しとは、この同じ方向（小乘的なこと）を指示するものである」と更に進んで他の處に於て氏はいふ。

百緣經とその義釋文字（即ち譬喻臺文學）との間の最大の相違は、信仰の異なることである。譬喻臺の著者達は大乘の信奉者であつた。彼等は大乘の著色を加へて物語を語り、又、大乘の思想を以て、物語に滲透せしめた。譬喻談の序言に於て、概して、各々の物語を導く慣用句（*cliché*）に自由な義釋がなされ、釋尊は、そこに列擧せられた種々の有情に依りてばかりでなく、菩薩の群に依りても圍繞されて、表はされる。而して、この菩薩らは、勝者の子達（*jinurasaṅgā*）と呼ばれて居る（中畧）次に百緣經第七十二話の善愛女緣の主人公である善愛女は、僧伽への施物を集むる功德を心の中に考へ、

善く説かれたる般若波羅密多法に依りて、われは覺すべ

し

(*prajñāpāramitādharmaṅgīr bodhayeva n subhāṣitān*) と述べて居る。佛陀は、又、*bodhirāt*（菩提の王）と稱せられ、彼れは、また、*samanrabhadraṅgaṅga*（普賢分）即ち、普く吉祥なる部分より成れるものと云はれる、譬喻臺文學にて、佛陀の最も屢々呼ばれる名は *grīghana*（<sup>3</sup>厚德）で、妙徳に満ちたるものの意である。佛陀や菩薩の群が、これらの本文に於て、屢々現はれると同様に、佛陀の反對者も、また多數現はれ魔羅が甚だ、屢々述べられて居る。以上は、如意樹譬喻臺と寶譬喻臺について云はれたことであるが、この同じことが、阿育譬喻臺にも適用せられる。<sup>4</sup>百緣經第八十話、醜女緣に於て、主人公の *Gaṅgarasthā* 女が、前生に於て、迦葉波佛の下に出家し、その教に於て、勤勉であつたことが語られて居るが、百緣經では、その教の内容は、蘊、處等の教理となつて居るが、阿育譬喻臺に於ては、大乘の根本（*mahāyānamūlān*）を學ぶこととなつて居るのである。

次に、以上、述べたことゝ一致することは、未來の生活

の表現が、無量光者 (Amitabha) と極樂についての在在と、多く關係をもつことである。百緣經の第四十三話に相當する寶髻譬喻の第四話に於て、佛陀は、阿難の求めに應じて、餓鬼女の爲に、餓鬼と地獄に生れたものへの救濟の全き教へを説示する、先づ發心して、三寶に歸敬せよ、然らば佛陀の光は、やがて、彼等に觸れるであらう、その結果として、人界に生が得られる、罪あるものは、再び、人界に生れるとき、自ら修道の生活、佛陀への歸敬等を身に行はねばならぬ、その報果が極樂である、そこに到達して、無量光者の教に従はなければならぬ、この方法にて、彼は常に覺の路を進み、遂に涅槃に至るであらう。と、

今一つの例を、私は如意樹譬喻より引用しよう。これは百緣經の第五十二話に相當する物語である。ある婆羅門の子息が、若くして死したのであるが、深く悲歎した彼の父に、自分の生れた天界の華麗さを、自ら示して、彼の悲しみを止め、彼れの慰藉に加ふるに、<sup>5)</sup>次の忠言を與へるのである。今、百緣經の序文に引用された梵文を、羅馬字化すれば下の如くである。

寶髻譬喻經に於ける大乘思想

tasmat vipra parityaktvā dahayasva citāgninā /  
sneho 'sti yadi te putre tan nāmnā dehi dānakam //  
tadasthīni ca gangāyān sūtrthe vā pravāhaya /  
tataḥ putraḥ sa te svarge gamiṣyati na saṃḥyaḥ //  
kin tvayā rudhiteṇāpi nāgamisyati sarvathā /  
yadi varṣasahasraṇi śihāsy evam sadā rudan //  
nāiva jīvet sutas te 'yam mriṣān pratyāgato hi kaḥ /  
udet(sic) sūryaḥ pratyeyam vā yadyagnih gītām  
vrajat //  
vikased vā girāu padmaṇi nāivāgacchet tavātmajaḥ /  
iti vijñāya he vipra tyaktvā mṛitaka tevaram //<sup>6)</sup> etc.

和譯

それ故に婆羅門よ、(屍體を)捨て、薪材にて焼かしめよ、

御身、若し、子に愛あらば、その名よりて、瑣少なりとも施物を與へよ。

かくて、その遺骨を、恒河又はよき聖處に流し去らしめよ、それより、かの御身の子は、疑なく、天に行くべし、

御身、いかに歎くとも何かせん、彼は、いかにしても、來らざるべし、

たとひ、千とせの間、御身、常に、かく慟哭しつゝありとも、

この御身の子は、決して生きざるべし、何物か、げに、死せしものゝ、歸り來りしや、

たとひ、日は西に昇るべくも、また、火は冷やかなる状態にならんとも、或は、蓮花、山に咲かんとも、御身の子は決して、來らざるべし、

と、かく知りて、おし、婆羅門よ、屍體を捨てゝ云々と、次に彼の子はいふ、

父は屍體を燒きて、出來るだけ速やかに教主、佛陀の弟子とならねばならぬ、佛への信仰は、閻魔の恐ろしき使者を彼れから引き止めて、極樂へ入ることを、彼れに保證し、そこに佛使に依りて導かれるであらう、その幸なる國、無量光者の支配する地にて、再び、彼れの子を見出すであらう、その偉大なる教主を禮敬するによりて、兩者は、遂に涅槃に達するであらうと、

この譬喩經の註釋文學が起つたその時代とその場所とに於ける大乘教徒の教化者は古い小乗の聖典集である譬喩經<sup>アッタケイナ</sup>を、自分達の信仰の規範と要求とに適應させた後、布教の有用な方便となり得る教化物語の秀でたる書誌として彼等にふさわしいものと判断したに相違ない、かゝるものと考ふるならば、韻文體の譬喩文學は、佛敎史にとりて興味ある、重要な文書である、これらの文學は、大乘信仰を有する在俗信者の通俗信仰と、それらの信者が常に彼等の敎化師より受けつゝあつた精神上の敎義との活々した描寫を與へる」

以上、長文に亘つたが、スパイエル氏の梵文百緣經の序文に於て、氏が譬喩文學に就て、大乘に關説した主なる個所を引用したのである、これに依りて、譬喩文學が大乘に屬するものであることが大體、理解出來ると思ふのである、自分は、昭和十三年末に、この文學に屬する譬喩經<sup>(7)</sup>の第一卷を出版した際、スパイエル氏が、その百緣經の題目に、小乘に屬する (belonging to the Hinayana) と

明記せられてあるので、これに區別するが爲めに寶鬘經の英文の題目の下に大乘に屬する (belonging to the Mahayana) と明記したのである、これを漢字で、大乘寶鬘經と書き、括弧をつけなかつたために、原文にない大乘を加へて讀者に疑を抱かせたであらうが、一は前記の理由に依り、一は、從來漢譯では大乘の寶鬘經は知られてないと思ふたために一般の注意を促す爲めに、特に大乘を冠したのであつた、今は故人となられた龍山章眞氏は、いち早く、この書を、大谷學報で、新刊紹介の勞をとられたのであつたが、その時、何故に大乘と冠したかの理由を教示されたいと附言があつたやうに記憶するのである、自分は、その時、お答へする機會を得られず、又、内容を精讀して頂けば、自然に了解せられると思ひ、何等お答へもしなかつたのであつた、今は永遠にお會いする機會を得られなくなり、實に同氏の靈に對し、相濟まぬことと思ひ、謝する次第である、今、茲に本書の梵文の二三を和譯して、その大乘思想を見ることにしたいと思ふ、

寶鬘寶鬘經の第一話は百緣經の第三話、窟情くわじやう子難陀見佛

寶鬘寶鬘經に於ける大乘思想

緣の大乘的義釋である、一長者あり、一子を難陀といふ、甚だ怠惰であり、常に己が室内にて牀座にありて起たず、しかし、極めて聰慧にて、衆を超へ、寢臥の中に於て、經論を讀みて、眞實なる法を喜んであつた、父なる長者はその怠惰を歎きて、その師なる富蘭那なる外道に教化を乞ふたのであるが、難陀はこれに従はず、佛、之を愍みて、その家に至り誇ふに難陀、喜んで之を迎ふ、こゝに於て、難陀に說法し、之を濟度し給ふ、難陀自ら悔責して、深く信敬を生じ、精勤となり、商主として、海に入り、寶を採りて歸るに至つた、後、佛及び僧伽を供養し、この功德を以て衆生を度する大誓願を發し、未來世に於て、精進力と號する佛となるべしとの佛の授記を受くるに至るのである、以上が、この説話の梗概であるが、これを第一話とする本經は、發端に、一切諸佛諸菩薩への歸敬を以て初めとする、次に序偈がある、

吉祥にして厚徳なる佛は、世に、正法を説き示した、その佛の諸の教は三界に於て、常に打勝つべし

これより本文が詩體を以て初まるのであるが、説話は凡

て、阿育王が優波鞠多尊者に懇請し、尊者は、自分の師の説かれしまゝを、その如く、王に語るのである、先づ、

佛、説法の光景を叙するに、佛は、種々の稱號を呼ばれ、

その住所も美辭を以て形容せられる、佛の隨從者は聲聞、

比丘、菩薩衆であるが、他の大乘經のやうに、一々の名前は

擧げて居ない、説話に依りて出入があり、他の處では、

清信男、清信女等をも擧げて居る、佛は、一切生類の利益

の爲に最高の正法を説き、菩提の道を明かにすることにな

つて居るが、この正法を聽聞せんが爲めに集へる群集は甚

だ廣範圍である、これも説話に依りて多少の出入がある

が、大體に於て、天龍八部を始め成就者 (siddhas) 持明

者 (vidyadhara) 一切の護世天、諸牟尼、大仙人、婆羅

門、刹帝利、吠奢首陀羅を含み、輔相、家臣、大人、長

者、商人、市民、地方民、邑落の住民其他の有情がすべて

佛の正法を聞かんと、喜んで集まつたとある、實に當時と

して大衆的であつたことは注意すべきことと思ふ、

次に説話を中絶して、佛陀が怠惰兒に説かれた説法を梵

文より譯するであらう、

聞け、若ものよ、大福あるものよ、罪事、福事の成就に於て、

われ、汝に善事に於ける因を説かん、そを、汝、こゝに行

ふべし、

人生は得難し、しかも閃光、または波濤の如く、さだめな

し、その人界を得て、

罪惡の滅盡と諸の福事の成就に意が爲さるべし、罪により

て惡趣に行き、福に依りて善趣に行くべし、

惡しき友を喜ぶことにより、意は罪惡に動轉すべし、

それゆゑに、惡を喜ぶものは、はげしき諸惡をも爲すべし、

その故に意惡しく罪最も深きものは、諸の正法を非難すべ

し、

それより、法の妨止により、惡しき器として、賤劣なるもの

となるべし、

それより、彼れは、賤劣なるものとして、實に、一切の有情

によりて非難せらる、

失望に制伏せられて、愚昧、無氣力となるべし、

氣力なき心に、怠惰が住すべし、

怠惰なるものは、決して、如何なる法、又は諸徳を成就せざるべし、

法の業に心なきものは徳なきものとして、何をか爲さん、享食にのみ常に執着せるものは畜類よりも劣れる人なり、がの徳なく、安樂に食へる人に、また、何の用があらん、福、又は徳にも、決して、意の進まざらん人は、福への精進を離れたるものとして、悪しき煩惱に害せらる、

悪魔の軍に惱まされ、うち勝たれ、束縛せらる、

悪魔への服従は婦人への奴隷の状態となるべし、

彼れは奴隷を喜び家畜の如く食ひて家に住す、

彼れは決して法を聞き、または見ることに努めざるべし、

法なくしては決して善趣に行かざるべし、

その故に法に於て行ぜんため、福業への努力を増長しつ、

善福を得んが爲めに三輪清淨(8)によりて施物を施すべし、

施與に依りて、法は成就し、法より心は清めらる、

清淨なる心あるものは戒に於て行ぜん、

戒あるものは實に賢慮なるべし、

賢者は忍辱を修習すべし、忍辱を有するものは、惡に勝ち、事を行ひ、事に巧みにして、精進を行はずべし、精進を有するものは最上の人なり、

大なる有情は禪定を得べし、禪定を得たる者は、梵住者なり、(9)

正念あるものは、智慧(般若)を成就すべし、智慧あるものは、實に諸徳の住處なり、

徳を知るものは種々の方便に依り諸有情を法に結ぶべし、

この福業の勢力に依り、菩提に對する誓願を行ふべし、

菩提への誓願の心に依り、十力を成就すべし、

その十力に依りて、甚だ恐るべき悪魔の諸軍を征服すべし、

一切の魔軍にうち勝ちて、正覺の智を得べし、

それより一切の世間に於て法輪を轉すべし、

かく法を轉じつゝ、教主となり、世間の主となるべし、

一切世間の利益を行し、大なる諸福もて昌へ、常にかく善趣に住して正覺の地位を得べし、

かく考えて、若ものよ、汝によりかくの如く善事に於て行ぜらるべし、

と、以上、佛陀が、怠惰なる童兒に説かれし教誡であるが、こゝに用いられて居るやうな論法は、この文學を通じて、概ね適用されるのであるが、この論法をフエーア氏は一種の連鎖論法 (Sorte) であるといふで居る、即ち順次前文の賓辭が次の文の主辭となりて説明せられ遂にある結論に達する論法であり、條理整然たるものがある、教の内容容としては、善趣に生れることを理想とするやうであるが、その善趣とは、この文學では概ね佛國を指すやうで、善逝の住所 (sugataya) 勝れたる牟尼の住所 (muni-ranilaya) 勝れたる勝者の住所 (jinaravasati) 佛國 (Buddhaksetra) 極樂 (Sukhavati) 等の名稱が用いらるゝ、この善趣には、法なくしては決して至り得ない、法に於て行する爲に布施を行すべく布施行に依りて法を成就し、法から心を清め、戒を行し乃至、十波羅密を行して正覺智を得、一切處に法論を轉じ、一切世間に利益をなし、常に善趣に住して正覺者の地位を得るに至るといふのが、佛の説

法の綱領である。

次に、本經の第二話は百緣經の第十三話に當る法護王請佛洗浴緣の義釋である。舍衛城に五百の商賈あり、寶所に至り、歸途、曠野に入り、徑路を迷失し、暑熱に値ひ、渴乏し、死の恐怖に震へたのであつた、その時、諸の天神に祈るに皆、感應がなかつた、その時、一人の優婆塞があり、衆に曰く、決して失望する勿れ、大難に遇ふも、堅忍を以て苦を救ひ得るであらう、堅忍を持して、必ず佛陀を念ぜよ、佛陀こそ世間の主であり、救主であり、一切の同情者である、わが語を聞きて、佛陀を念ぜよと、この語を聞いて、凡ての商賈等は佛を念じ、その救ひを祈つた、こゝに佛陀は彼らの爲めに、大雨を降らし、涼風至り、熱渴除くことを得た、かくて、五百の商賈は、佛の許に至り、法を聞かんことを欲した、茲に於て佛は、説法して開悟せしめた、この時、諸の比丘は、佛が今生に於て諸の商賈の爲めに大雨を降して之を救ふに至つた因縁を教示されんことを請ひ、佛はその因縁を解説し給ふた、昔時、栴檀と名くる佛があつた。ある都城に入り衆生の利益の爲めに菩提行を

説き、比丘衆と共にある精舎に留まられ、その時、其國の王、佛陀の來り給ふを開き、諸臣と共に喜んで其の所に至り、近いて佛を禮す、その時、佛は初中後善なる最高の法を説かれた、今その説法を梵文より拙譯を試むれば下の如くである。

王よ、この世に於て堅實なる法を、常に怠りなく聞かれよ、

世間は法に依りて勝たれ、法に依りて天界に昇り得べし、それ故に敬ひて、常に人民を保護すべし、

人民保護の誓行は諸の王の根本の法なりと諸の賢人は云へり、

臣民保護の誓行を捨て、他の多くの誓行を何にかせん、

されば王よ、御身は善法に於て庶民を守らるべし、

御身、常に十不善業より防ぎ、

庶民を法に結ぶべし、その功德により御身は解脱せん、

初めに庶民に、正覺位の因たる施與を行はしめよ、

その功德に依り、庶民は盛んに、善に於て行ず、

世間、善業を喜ぶに依り、その功德もて王は昌ゆるなり、この故に自ら施與をなして、衆民に戒を行ぜしむべし、戒によりて身は清まり、身清まれるものは賢慮となるべし、

よき思慮あるものは、忍辱により諸の敵に勝ちて、輝やく、

この故に精進力によりて一切の有情を幸安に定着すべし、それより煩惱に打勝ち、靜慮して、菩提を成就すべし、

菩提誓願の心もて行するものは智慧を成就すべし、

それより智慧者は諸の方便により世間を菩提に定着すべし、

それより諸魔に打勝ちて正覺智を得べし、

そこに於て六神通を得て十地の主となるべし、

それより一切の三界の住者だちを従へ、

善逝の法に立たしめ、自らは涅槃を行すべし、

大王よ、かくの如く、涅槃地の成就を知りて、

御身に涅槃への希望あらば、これらに於て行すべし、

それより御身に幸運あり、常に世間の幸福を得べし、

次第に婆羅密多を滿して涅槃を得るに至るべし、涅槃は最高の智なり、涅槃は最高の安樂なり、涅槃は最高の福なり、涅槃は最高の依所なり、かく、實に一切の善行を涅槃の因なりと知りて、かく自ら、法に立ち、庶民をもまた導くべし、

以上が佛の王に對する説法であるが、それより王は佛及び僧衆を供養することとなる、其後、天雨らず、飢渴に苦しむに至りて諸神に祈りて感應なく、茲に佛は一切の有情を保護するが故に、佛を僧衆と共に奉事して、浴池に於て洗浴し、大供養をなして禮敬すれば、佛は降雨と豊饒とを致して必ず至る處に幸安を與ふべく、吾らは正法を持して、聞譽、功德、安樂を得て、終りには極樂に至り得べしと信じて、栴檀佛に乞ひ其許しを得て、佛を洗浴、供養し奉つた、佛はその教信に依り天雨を降らし、至る所に豊饒をもたらした。こゝに於て王は佛恩を思ひ、佛の爪髪を乞ひ、塔を建て禮拜供養し、その功德に依り、衆生を度せんとの誓願を起し、その塔を洗浴して敬事した、かく因縁を語り、われはその時の王であり、そのなした功德力に依

り、今も天雨を降らして至る所、災害なく豊饒ならしめるを得るであると告げたのである。

以上第一話、第二話の大乘思想を概観したのであるが、先に述べた百緣經の第四十三話である惡見不施水墮餓鬼縁に當るのが本經の第四話であり、この説話は、水を施さなかつた惡見女が餓鬼となりて苦しむのであるが、阿難が如何にしてこの女の罪より解脱して救はるゝかを佛に問ふ、佛之に答へて、三寶を念するならば世自在者 (lokegyara) が現はれ、その光を以て彼の女に觸れるであらう、それより彼の女は智慧あるものとなり安樂を得て驚くのであるが世自在者はそれを見て彼女を覺すべく近づき己が身より、流れ出でしめたる水や種々の食物もて彼女を飽かしめそれより聖道を示し、法の説示を聞かしめるのである、これより佛は世自在者の種々の功德を説き、極樂の名は本説話に於て實に二十回以上も出づるのである。別の機會に本話を和譯したいと思ふ。

寶鬘譬喻經の大乘思想をその二三の説話の中より引用和譯したのである。

終りに、前述の如く、スパイエル氏は梵文百緣經の標題の下に、小乗に屬すると明記せられたのであるが、これはもと南條目錄に據つたもので、南條目錄は闍藏知津の分類を引用したのであるが、これは百緣經の内容に一致するとは云へない、前文に擧げた二三の説話の如く、百緣經の第一品は菩薩授記品と名け、十話を含むのであるが、何れも種々の人々が、種々の名のつく佛となることを佛から授記を受ける物語であつて大乘であることは明らかである、その誓願の文は各處に「この善根功德を持ち、未來世の中、盲冥の衆生の爲めに眼目となり、歸依無き者のために歸依となり、救護なき者の爲に救護となり、未だ解脱せざるもの、爲に解脱を作し、未だ安穩ならざる者の爲に安穩を作し、未だ涅槃せざるものを涅槃せしむ」といひ、又、佛が微笑し給ふとき、その面門より五色の光を出し、佛を繞ることを三匝にして還び入るのであるが、聲聞覺を授記する時は、み口より入り、緣覺を授記する時は眉間より入り、成佛を授記する時は頂より入るとする、又、各處に於てその説話を説かれし時、須陀洹を得るもの、斯陀舍、阿那舍、

阿羅漢を得るものあり、辟支佛心を發すものあり、無上菩提心を發すものありと述べられて居る、  
以上に依て百緣經が純小乗でないことは明かであり、これを義釋する譬喩譬文學が、一層、大乘的に進んだことは既に述べた如くである。

註

- (1) *Annals du Musée Guimet Tome 18me*
- (2) *Avadana gataka. Bibliotheca Buddhica III. P. XVII*
- (3) *Dipavansa, P. 14. 大智度論卷二、正藏二十五、七十三頁*
- (4) *Avadana gataka. P. 59.*
- (5) 〃 *P. XXVII*
- (6) *devara* 未詳
- (7) 拙著 *Ratnamālvadana* 7. 昭和十三年十二月發行
- (8) 施者、受者、施物の三輪の相を滅して、無心に住し、布施を行ずるといふ
- (9) 慈惠喜捨の四無量心をいふ、この四無量を修するに依り、欲界天を度し、梵處に住し得べしとする
- (10) *Annales du Musée Guimet Tome 18me P. 33.*
- (11) *Ratnamālvadana. P. 35, 52, 102, 117, 167.*